

戦国時代の民主主義者

小野ユージン

ホッブズとマルクスの思想は似ている。

人間が、欲望に基づいた自然な政治行為をした結果生じた「万人の万人に対する闘争状態」。このような望ましくない状況を改善するために、政治指導者の下に権力を集中させ、その力による統制で秩序や平和をもたらそうとしたホッブズの思想。

これは、上手くいけば秩序や平和をもたらすはするが、同時に多くの人々の自由の抑圧、専制政治という弊害を生み出す。

一方、人間が欲望に基づいた自然な経済行為をした結果生じた資本主義社会の諸問題（貧困、搾取、経済的不平等など）。

これらの諸問題を、全ての権力を集中させた政治指導者の力によって解決しようとしたマルクス－レーニン主義の思想。

これも上手くいったとすれば貧困などの問題を解決できるかもしれないが、同時に自由な経済活動の抑制、専制政治という弊害をもたらす。

（また、実際に社会主義的政治体制をとった場合、多くの労働者はブルジョワジーではなく、プロレタリアートの代表を自称する政治指導者によって搾取されるだけであり、経済的不平等などの問題が解決されることはまずないだろう。）

ホッブズの社会思想を「政治制度を構築する思想」としてみた場合には、その後のロックやルソーの民主主義思想によって乗り越えられるべき思想、あるいはその土台、基礎となる思想として解釈できる。

同様にマルクスの社会思想を「経済制度を構築する思想」としてみた場合には、その後の思想家によって乗り越えられるべき思想、「ポスト資本主義の経済制度」（これを「民主主義的経済制度」と呼んでおく）を構築するための重要な土台、基礎となる思想として解釈できるだろう。

資本主義と社会主義を止揚した経済思想、資本主義と社会主義の良い所だけを取り入れ悪い所を克服した経済制度。

そのような思想、理論を生み出すことができ、なおかつそれが十分な批判に耐えうるものであるならば、そのような思想、理論を生み出した人は、社会思想史の教科書にホッブズ、ロック、ルソー、マルクスの次にくる大物として名前が残るだろう（それに成功した人がまだいないだけで、そのような試みをしている人は世界中に何人もいるのかもしれない）。

ただ、「ポスト資本主義の経済制度」の思想、理論が今後生まれてくるとしても、それは容易になされることではないだろう。

ホッブズとロック、ルソーの間に一世紀以上の間があいているのだから、マルクスから一世紀以上たたなければ生まれてはこないだろう。

だが、そのような思想を生み出すためのヒントはすでにあるだろう。

ロックやルソーの民主主義思想が、人間の自由な行為を原則としながらも、それによって生じる弊害を少なくする制度を構想したように、「ポスト資本主義の経済制度」も人間の自由な経済活動を前提としながらも、それによって生じる弊害を減少させる制度とすべきだろう。

ただし、近代化した産業社会、民主主義社会においては、前近代のような土地や人の支配をめぐる武力闘争は非合法とされ、人権思想の発達により他者の権利や生存を脅かす行為も規制されるようになった。

同じように「民主主義的経済制度」においてもあらゆる経済活動が無条件に容認されるべきではないだろう。

貧困、飢餓など他者の生存を脅かす結果をもたらす経済行為、社会の安定、調和や人々の生活に重大な悪影響をもたらす経済行為には一定の規制が必要であろう。

その場合には何が「規制すべき経済的自由」か、何が「規制すべきではない経済的自由」なのかを厳密に考察する必要があるだろう。

そして、ある経済行為を規制した結果がどうなるかも十分に検討する必要があるだろう（ある法律の制定が、本来の目的とは正反対の結果をもたらすということが往々にしてあるのだから）。

なお私は、「ポスト資本主義の経済制度」（「民主主義的経済制度」）の思想、理論が生み出されれば、それによって人類の未来が明るくなるなどと楽観的に考えているわけではない。

まず、その思想、理論が現実に実現可能かどうかはわからない。

それにそのような制度が実現されても、当初予期していなかった大きな弊害が生じる可能性もある（現実の社会主義国家が、マルクス主義者たちが目指していた国家、社会とはまったくことなったものとなったように）。

そしてフランス革命時がそうであったように、ある国で社会体制の根本的な変革がおこった場合には、それをめぐって国際紛争が生じる可能性が高いだろう。

核時代の今日、資本主義体制の是非をめぐって世界戦争がおきれば世界が崩壊してしまうこともあるだろう。

資本主義と社会主義－戦国時代の民主主義者

資本主義と社会主義の戦いに資本主義が勝利した、といった言説がメディアを賑わせてから既に15年近くがすぎた（近年では資本主義の崩壊などといった言説も目にするようになったが）。

資本主義に対しても社会主義に対しても批判的な考えをもっていたものからすれば、資本主義と社会主義との戦いなどはなかったといえる。

社会主義を支持していた人も、これを批判していた人も、社会主義を過大評価していたために、資本主義と社会主義との戦いがあるようにみえただけだろう。

社会主義は、資本主義との戦いの舞台にすらあがっていなかったといえる。

資本主義経済と社会主義経済を比較した場合、どちらも多くの欠陥を抱えた経済制度に過ぎず、どちらが良いか上かといった問題ではないだろう。

この比較は、封建制と絶対王政（あるいは中央集権制専制国家）、どちらが良いか上かといった比較と同様のものだろう

封建制も絶対王政も、民主主義的政治制度と比較すれば劣位の、あるいは望ましくない政治制度にすぎない。

経済制度に関しては、政治制度における民主主義のような、現在考えられる制度の中では一番望ましいと思えるものがないのが実情といえる。

だから、政治制度における民主主義のような経済制度が構想された時、はじめて資本主義ともう1つの経済制度との間の戦いが生じるといえるだろう。

一方、民主主義的政治制度と社会主義的政治制度を比較した場合には、前者の方がより望ましいものといえるだろう。

社会主義とは、資本主義経済の諸問題を解決するのと引き換えに、民主主義政治の良い点をほとんど放棄してしまった奇妙な政治制度といえる。

マルクスレーニン主義の政治思想は、プラトンの哲人王の政治、孔子の徳の政治と同様、「政治権力をもった者が、その力を正しく使うことによって善政を行う」といったものにすぎない。

「権力は腐敗する」という原則に立ち、権力を分散させ互いに抑制させたり、腐敗した権力者をその座から引きずりおろす制度を構築したり、権力の濫用、横暴を抑止することを意図した民主主義制度からはあきらかに後退している。

資本主義経済の分析に優れた知性を発揮したマルクス（主義者）が、政治に対してはなぜこんなにもナイーブな考えしかもっていなかったのか不思議ですらある。

それだけマルクスの生きていた時代の労働者たちが悲惨な状態におかれていて、それを救済することが喫緊の課題だったのだろう。

そして、その後のマルクス主義者たちが、下部構造（経済）を重視したマルクスの思想を杓子定規に解釈して、下部構造の問題さえ解決すれば上部構造の問題もすべて解決できると楽観的に考えてしまったのかもしれない（最初の社会主義革命といわれたロシア革命が、上部構造におい

て権力を掌握した政治指導者が、その力によって下部構造を変革するという「下部構造決定論」と逆の形をとっていたのが皮肉な話ではあるが）。

民主主義—資本主義的政治経済制度と、社会主義的政治経済制度を比較した場合、民主主義的制度が上手く機能しているのならば、民主主義—資本主義的制度の方がより良い制度といえるだろう（ただし、資本主義経済下で貧困層が増大し、生活すらできない人が多数でてくれば、社会主義的政策で貧困をなくした方が良く考える人が増えてくるだろう）。

革命は多くの犠牲を伴うのだから、民主主義—資本主義制度を劣位の制度にかえようとする人は少数派にすぎないだろう。

だから、民主主義—資本主義体制から社会主義体制へ移行した国がほとんどないのは当然といえるだろう。

では現存する（した）社会主義国家をどう説明するのか、という疑問をもつ人もいるかもしれない。

これは、資本主義化も民主主義化もしていない非近代的な社会に生きていた人たちが、自分たちの社会、国家を近代化させる際に、民主主義—資本主義制度と社会主義制度という2つの選択肢があり、後者を選択した国が社会主義国家となったという説明が最も説得力があるだろう。

マルクス（主義者たち）は、社会民主主義を、資本主義を擁護し延命させるものにすぎないとして批判したそうだが、歴史は一回りしてその時点まで戻ってしまったような気がする。

社会主義に多くの人が幻想を抱いていた時代には、社会民主主義は理想の実現を阻む否定すべきものであったのかもしれない。

だが、「資本主義もダメだが社会主義もダメ」という認識を多くの人がもつようになった時代においては、これらにかわるより望ましい経済制度が生まれるまでの間は、あらゆる手段を用いて資本主義経済の弊害を減少させていくしかないであろう。（そのような地道な試みの中から新しい経済制度の構想が生まれてくるかもしれない）。

また、アメリカにおいて資本主義の矛盾が最も顕在化している状況をみると、資本主義がその内部矛盾によって崩壊するという現象は、アメリカにおいて最初におこるかもしれない（社会主義との戦いに勝利したと言って、資本主義を謳歌、礼讃したアメリカでもしそのようなことがおきるとしたら、これもまた皮肉な話ではあるが）。

資本主義がその内部矛盾によって崩壊することがおこるとしても、その後どのような経済制度ができあがるのか、正確なことは誰にもわからないだろう。

だが、社会制度が根本から変革される時には、それを正当化したり理論的に支える社会思想が生まれてきているから、これから数世紀のうちには資本主義後の経済制度を構想した社会思想が生まれてくるのではないだろうか。

資本主義社会に生き、これを嫌悪、憎悪している人たちは、戦国時代に生きている民主主義者のようなものだ。

「経済的戦国社会」といえる資本主義社会を、自分たちが望ましいと思う社会につくりかえる力がないだけでなく、どのような社会がより望ましいのか、具体的な青写真、設計図すらない状態なのだから。

ただ、何百年かあとにはやってくるかもしれないより望ましい社会を待ち続けるしかない夢想家たち。

（さしずめ、社会主義運動は千年王国運動のようなものだろう。この世に楽園をつくろうとした禁欲的な理想主義者たちの運動...）。

進歩史観の2つのバリエーションー「折り返し史観」と「螺旋史観」

進歩史観、といっても人間の社会や歴史が実際に進歩しているわけではなく、人間の社会、歴史が過去から現在まで進歩してきたとする認識や解釈、あるいは人間の社会を将来にむけてより良いものに改良、改革していかなければいけないという規範意識、これらを進歩史観と呼んでいるのにすぎないのである。

また、歴史法則とは、過去に起こった出来事の傾向や特徴を法則と呼んでいるのにすぎないのである。

歴史観も歴史法則も人間の観念の産物にすぎず、現実が起こった出来事を分析したり解釈したりする道具、手段にすぎない。

だが、人間の思考は面白いもので、現実の歴史が歴史観や歴史法則に基づいて動いているという倒錯した考えに陥りがちである。

だから、これから示す2つの歴史観も一種の知的遊びにすぎず、現実の歴史がこの歴史観通りに動いていくと主張したいわけではない。

だが、もしかしたらこれから起きるかもしれない（あるいは既に起こっているかもしれない）歴史の変化を表しているかもしれない。

1 「折り返し史観」

社会の進歩はある時点で頂点をむかえ、そこからは折り返し地点をすぎるように退行していくという歴史観。

「民主主義一資本主義社会」のある時点において歴史の進歩は頂点をむかえる。

だが、その後資本主義経済の諸矛盾が民主主義システムのもつ良い点を徐々に蝕んでいく。

政治、経済、社会、宗教、様々な分野の上層階層の人間たちが癒着し、利益共同体を形成し、社会から公平、公正、平等といった理念が失われていく。

富裕層が特権階級化し、社会全体が中世的な身分社会へと逆行していく。

世襲化した政治権力者が、やがてはかつての国王のような存在となり、民主政、共和政から君主政へと政治制度も逆行していく。

「力のある者」がより強い力を手に入れ、「富をもつ者」がより多くの富を手に入れるという、前近代的な弱肉強食の世界へと人間社会が退行していくだろうという歴史観。

2 「螺旋史観」

人間の社会は、螺旋階段を登るようにして2つの段階で進歩する。

人間が欲望に基づいた政治行為をした結果形成された非近代的なあらゆる政治制度。

これらの制度のもつ弊害を解消するために理性、倫理、理念などによって作為的に形成された民主主義的政治制度。

ここにおいて一段階目の進歩が達成される。

しかし、民主主義社会における経済状態は、人間が欲望に基づく経済行為をした結果形成され

た「経済的戦国社会」ともいうべき資本主義社会であり、非近代的な政治制度がそうであったように多くの弊害を抱えている。

この弊害を解消するために理性、倫理、理念などによってより望ましい経済制度（「民主主義的経済制度」）が形成された時に、二段階目の進歩が達成される。

かつては資本主義から社会主義への移行を歴史の進歩とみなす人々がいた。だがこれは、「封建制」から「絶対王政」への移行のようなものにすぎない。政治的戦国社会－非近代的政治制度－民主主義＝資本主義（経済的戦国社会）－民主主義的経済体制。

このような変遷を経て人間社会が進歩していくという歴史観。

原始共産制について

「原始共産制」の説は今でも根強く支持されているのだろうか。

マルクス主義者あるいは共産主義者たちの失敗の源は、人間の原始の状態を共産社会—支配、被支配関係や貧富の格差のない状態と考えたことにあるのではないだろうか。

かつてそのようなユートピア的な状態があったと考えるから、いつかまた同じようなユートピアに戻れると考えるのだろう。

人間と猿の祖先が共通だとする進化論の説が正しいとすれば、そして猿たちの社会が、ボス猿が他の猿たちを支配、抑圧する不平等なものであることを考えるとすれば、人間の太古の状態も力の強い者が他の者を征服、支配する不平等な社会だったのではないだろうか。

原始共産制説の根拠の1つは、原始の時代においては権力者を埋葬した王墓のようなもの（そしてその中に添えられた権力者の富を象徴する財物）がなかったことにあるらしい。

だがこれは、権力者や支配者がいなかったことを示しているのではなく、権力者を埋葬する風習、墓の中に権力者の財物を一緒に埋める風習がまだなかったことを意味しているだけなのではないだろうか。

太古から人間の社会は不平等で、力のある者が他者を支配、抑圧している状態だったのなら、共産主義者たちは、人間には作りだすことのできない理想の社会を追い求めているだけだといえる。

だが、猿たちの中には支配、被支配関係のない比較的平等な社会を営んでいるものもいるそうである（このような猿を「共産猿」と呼んでおく）。

これから述べる説は、科学的には何の根拠もない想像にすぎないのだが、もしかしたら人類というのは「ボス猿」の祖先と「共産猿」の祖先が交配した結果生まれたのではないだろうか。

人類は「ボス猿」の祖先の遺伝子をつよく受け継いでいるため、その社会から力による支配がなくならず、力のある者への憧れを抱く人たちも多くいる。

一方、人類へと受け継がれた「共産猿」の祖先たちの記憶が、「原始共産制」への郷愁、そして失われたユートピアを求める思考をもたらしているのではないだろうか。

進歩的近代主義と選択的近代主義

近代主義を「進歩的近代主義」と「選択的近代主義」、2つのものにわけたいと思う。

「進歩的近代主義」では、非近代的な社会から近代的な社会への移行を歴史の進歩と考える。この立場では、近代化されていない国や地域を遅れたもの、劣ったものとみなし、あまつさえ近代化されていない国を近代化させることを口実として支配、征服することを、正しいことだとすら考える。

一方、「選択的近代主義」では、社会を近代化させるかどうかは、そこに住む人たちが自分たちの意志で決めるべき問題であると考ええる。

非近代的な社会は、近代的な社会より遅れたもの、劣ったものではなく、そこに住む人々がどちらの社会をより望ましいものと考えているかのちがいだと考える。

(この場合、非近代的な社会に、近代的な価値観からすれば残酷な風習が残っているとき、国際社会はそれにどう対応するべきかという問題が生じる。非近代的な文化を尊重すれば残酷な風習が温存され、強制的に廃止させようとするれば、近代的な価値観を普遍的なものだと認めることになる。言論行為を通じて、残酷にみえる風習を自発的にあらためるよう説得するというのが賢明な対応であるのかもしれない。)

ただ、人々が自由な行為をした結果、自然な形で非近代的な社会から近代的な社会へと移行した場合、これを作為的に非近代的なものへと戻すことは難しい。

「選択的近代主義」が問題となるのは、近代化していない社会を作為的に近代化させようとする場合、これに賛成するか反対するかをめぐってであろう。

社会のあり方につよい影響力をもつ人たち（権力者、上層階層の人間、宗教家など）や、国民の大多数が近代化への移行を望まない社会。

そのような社会に生きる近代主義者は、孤立せざるをえないだろう。

近代化を歴史の必然とみなし、近代化を否定する人たちを反動勢力とみなすことによって、自己の立場を正当化せざるをえないのだろう。

「選択的近代主義」の立場をとれるのは、ある程度近代化された社会に生きる近代主義者だけといえる。

非近代的な社会に生きる近代主義者にとっては、社会を近代化させるということは自身のアイデンティティにかかわる切実な問題であり、これをある意味客観的、冷静に考えることはできないのであろう。

これは、日本の政治的近代化をめざす人たちにとっても同じことがいえる。

日本は、経済的には充分近代化したといえるだろうが、政治的には半分近代化したにすぎないだろう。

日本の政治は「擬似立憲国家」「半分民主主義」のようなもので、非近代的な要素がまだ根強く残っている。

政治家や国民の多くがこのような状態をよしとしているのだから、政治的近代化を望んでいる人たちは社会で孤立せざるをえない。

制度や法は、権力を掌握しその力によって近代的なものを作り出すことができる。
だが、人々の政治意識や価値観を近代的なものにかえるというのは作為的にはできないことである。
人々の意識や価値観が、長い時間をかけて徐々に近代的なものにかわっていくのを待っているしかないのだろう。

形式民主主義と実態民主主義

民主主義に関しては、民主主義的な法や制度を整備すればそれでよいと考えている人と、それだけでは不十分で、政治の実態が民主主義的な理念に基づいたものにならないといけないと考えている人がいる。

前者を「形式民主主義者」、後者を「実態民主主義者」と呼ぼう。

私自身はといえば、政治の実態が民主主義的なものになるのが望ましいとは思いうし、またそうしようと地道な努力を続けなければ民主主義は形骸化してしまうだろう。

だが、人間にできるのは民主主義的な法や制度を作り出すことだけであって、政治の実態を民主主義的なものにしようとする試みは、結局は挫折するのではないかとも思っている。

民主主義とは、政治はこうあって欲しいという理想、願望であり、また政治はかくあらねばならぬという規範、理念であろう。

しかし、人間の営む政治は、民主主義化する以前の非近代的な政治意識や価値観、さらには人間の性質に大きく影響されていて、これが民主主義社会における「形式（法や制度）、理念」と「実態」との乖離の大きな要因となっているのだろう。

法や制度は作為的、人為的に作り出すことができるが、人間の内面を思い通りに作りかえることは困難である。

明治の知識人たちは、近代社会にふさわしい個の確立を目標とし、戦後民主主義者たちは、日本人の内面を民主主義社会にふさわしいものにかえようと試みた。

だが、こうした試みはほぼ失敗したとみていいだろう（部分的には成功したと解釈することもできるが）。

もちろん、社会が近代化したことによって、また民主主義的な法や制度が制定されたことによって、社会環境、社会制度が逆に人間に影響を与え、人間の性質や内面（政治意識、価値観など）が近代的、民主主義的なものにかわっていくということもあるだろう。

しかし、こうした内面の変化は長い時間をかけ徐々におこるものであって、何百年、何千年と続いた非近代的、非民主主義的な時代に形成された政治意識や価値観、人間の性質がただちになくなることはないだろう。

民主主義の「形式、理念」と「実態」との乖離は欧米民主主義諸国においてもみられるだろうが、西洋の民主主義的な法や制度を輸入、移植した非西洋地域の民主主義国家においては、その乖離はより大きなものになるだろう。

戦後の日本に関しては、国民や政治家の多くが明治的な政治意識や価値観しかもっていない社会に、占領軍の力を背景にして民主的な憲法、政治制度が導入されたことが、「形式」と「実態」との乖離をより大きなものにしたといえる。

民主主義的な政治意識や価値観は、民主主義的な法や制度を作ろうとするその過程の中で徐々に根づいていくのだろう。

自分たちの力で戦後の憲法や政治制度を作り出せなかった日本人は、戦後の憲法や政治制度のバックボーンとなっている民主主義的な政治意識や価値観を、内面化させる機会を失ったまま時を

すごしてしまったといえるだろう。

憲法や政治制度を明治的なものに作りかえれば、「形式」と「実態」との乖離は今よりも少ないものになるだろう。

逆説的だが、日本の国家や社会が戦前回帰したならば、民主主義的な憲法や制度をあらたに作り出す運動を進める中で、多くの日本人が民主主義的な政治意識や価値観を身につけるようになるかもしれない。

(現時点で国民の多くが明治的な体制への移行に賛成するとは思えないけれども。)

保守主義について

図書館で西部邁の本を立ち読みしていたら、保守主義とは穏健的改良主義、漸進主義のことをいうと記述してあった。

保守とは、改革や改良に反対する伝統主義者、守旧派を意味すると思い込んでいたので、穏健な形ではあれ社会の改良に賛成する立場を保守主義というのだと知ってちょっとびっくりした。

だが、日本で保守派と呼ばれている人で、穏健的改良主義者の意味で保守とされている人は少数派であろう。

大部分の保守派は、伝統主義者、守旧派の意味で保守とされているのではないだろうか。（ただし、この場合の守るべき伝統とは、江戸時代までの前近代的な伝統ではなく、明治時代、明治国家の伝統であろう。戦後憲法、戦後民主主義体制に対して批判的な態度をとり、戦前の明治憲法体制に近いものに回帰しようとする立場だろう。）

コンサバティブ、コンサバティズムを日本語で保守、保守主義者と訳したのは失敗だったのではないだろうか。

日本語の保守という言葉は、私自身がそう思い込んでいたように、改革や改良に反対する伝統主義、守旧派のイメージがつよい。

コンサバティズムの本来の意味である穏健的改良主義をあらゆる訳語としては、穏健主義、漸進主義といった言葉を定着させ、伝統主義をあらゆる保守主義と区別した方がよかったのではないだろうか。

コンサバティズムという言葉自体に穏健的改良主義と伝統主義、両方の意味が含まれているのであれば、その訳語に保守主義をあてたのはまちがいはいえないだろう。

ただ、仮にそうであったとしても、イギリスにおいては伝統主義者たちの政治的影響力はほとんどなく、民主主義、自由主義的価値観を前提とした上で保守と革新、保守とリベラルの対立があったのではないだろうか。

民主主義、自由主義的価値観が社会的土壌に根づいていない上、それらに批判的な伝統主義者、守旧派が政治的影響力をつよくもっている日本で、コンサバティブを保守と訳し、穏健派と守旧派が「保守」として一括りにされたのは、日本の政治にとって不幸なことだったのではないだろうか。

コンサバティブを保守と訳したために、穏健派が守旧派と一緒にになり、革新派（急進的改革主義者）に対抗する保守勢力となったのか。

それとも元々日本の穏健派は、革新派よりは守旧派との方が相性がよく、両者が一つの勢力となっていたので、穏健派と守旧派を含む保守という言葉でコンサバティブの訳語にしたのかはわからない。

ただ、革新派と共に日本の民主主義化を推し進めるべき立場にあっただろう穏健派が、戦後民主主義に批判的な守旧派と派閥を形成してしまったことが、日本の民主主義化が中途半端なままになってしまった一要因でもあろう。

（戦後、思想言論の世界で主流派となった革新派が、穏健派を保守反動呼ばわりして、彼らを守

旧派の側へ追いやってしまったという側面も大きいのだろうけれども。)

戦後の日本では、革新派と穏健派の間に分断線が引かれ、政治の世界では守旧派と穏健派からなる保守派が与党、多数派となり、革新派は政治的影響力をほとんどもてなくなってしまった。

一方、思想言論の世界では革新派が圧倒的な多数派、主流派となり、保守派が少数派になるという政治の世界とは逆転した現象が生じてしまった。

穏健派と守旧派を区別して、「革新派・急進的改革主義者」、「穏健派（漸進派）・穏健的改良主義者」、「守旧派・明治伝統主義者」という3つの勢力が、政治の世界でも思想言論の世界でも鼎立する状態が一番望ましかったのではないだろうか。

3つの立場の人たちが、様々な問題について討議討論を通じて最も良い解決策の合意案を形成する。

そのような行為の積み重ねが、日本を半民主主義状態から民主主義国家へと脱皮させることになったのではないだろうか。

政治の世界でも思想言論の世界でも、革新派と保守派が互いの主張をぶつけ合うだけのイデオロギー闘争を繰り返す。

その結果、建設的な合意案は形成されず、数の多い方の意見がゴリ押しされる。

このような状態が長いこと続いてきたために、日本の民主主義がなかなか成熟しないのだろう。

戦国時代の民主主義者

<http://p.booklog.jp/book/7871>

著者：小野ユージン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/onoeugene/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/7871>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ